

未だ非常時にある福島県 未来へ向けて

福島県内はまだ非常時であることに変わりはない。12万人余りという多くの人々が、県内外で避難生活を強いられている。そんな中で2015年1月29日付けの「福島民報」は、震災関連死が1,851人になっていることを報道していた。長引く避難生活が人々の「いのち」を確実に浸食しているように感じられる。そういう福島県の状況の中で、福島の高校生たちのなかには地道に、福島の復興、風評払拭のために自分には何が出来るのかを真剣に考えて行動に移して生徒たちもいる。震災を体験して「いのち」の意味、支えあわなければ生きていけない現実を知り、今もそれを生きている。環境が生徒たちを育てているのだと思う。そんなことを感じているときに『丁寧に生きる飯舘村の子どもたち』との新聞の文字がきらきらと輝いて私に向かって飛び込んできた。背筋が伸びる思いがした。5年目に入ると、震災体験のない子どもたちも増えている。「震災を伝え続けること」が次世代を担う「人」を育てるのに大切であると思われる。今の子どもたちは不況の中で育ててきたので、「いい暮らしをしたければ勉強しなさい」という言葉に対する反応は薄く、「誰かの役に立ちたいのなら勉強しなさい」と諭されることの方が心に響くのだそうだ。

『雪とパイナップル』（鎌田實著）が中学の国語の教科書に載っている。それを読んだ飯舘村の中学校の生徒が鎌田さんを招いて話を聴いた。子どもたちにとって放射線への不安が強いようで、「原発事故直後、雪遊びをしたが体に影響はないか」「いつ飯舘村に帰れますか」などとても直截で難しい質問が出たという。鎌田さんは生徒に向かって「一人ひとりには自由があるよね」とエールをおくった。話のあとの感想には「勇気と自由、この二つがあれば頑張れる。自分には自由があるという事を忘れずに生活していこうと思います」としたためている子どももいて、飯舘の「までい」を子どもたちは生きていることに、鎌田さん自身が励まされたという。（「までい」とは手間暇を惜しまずに丁寧に、心を込めて、つつましくという意味。（毎日新聞 1月6日記事より）

仮設校舎で学んでいる飯舘中学校の生徒に野球選手の川崎宗則さんが「前をむいていくしかない」というメッセージを伝えるために野球教室を行った。そして声を出したあと教室で授業を行った。プロになった当初に感じた挫折や家族に支えられたことを語った。授業を振り返って川崎選手は「人間のカ、パワーを感じました。すごく強い生き生きした目をしていました」と語ったとのこと。「強い生き生きした目」は「ていねいに生を生きる」ものの目ではないだろうか。



（「フラッピーイチゴパン」。いわき市・平商業高校の生徒たちとファミリーマートの共同開発。）

復興が進められている富岡町



人々の帰還を目指して、富岡駅が崩壊する危険があるとのことで解体されるというニュースがマスコミでも報道された。早晩解体事業に入るだろうというのは昨年末からの状況を見ていて感じられてはいたが、マスコミで報道があったということは、解体が始まればあっという間に片付いてしまう。更地になってしまう前の段階を体に覚えさせるために、浜通りに向かった。

1 か月の間に景色はかなり変化していた。高速道路を通り、常磐道の行き止まり「富岡 IC」まで行き、そこから富岡駅まで戻る。帰還困難区域の住宅街を迂回しながら、国道6号線に出た。『常磐富岡』まで行かなければ、この帰還困難区域の一部を通ることはできなかったが、期せずしてそこを通ることが出来、6号線『富岡一浪江』の途中から富岡に向けて戻るコースをたどることになった。バリケードが国道沿いに設けられていることに変わりはない。しかし、気づくと今まで除染されていなかった場所が除染され、汚染土がフレコンバックに入れられて、そこかしこに積み重ねられていた。草茫茫だったところがすっきりとしているところもあり、景色が変わっていたのに目を見張った。

富岡駅に着くと、駅の周りには柵が設けられ、駅の看板は取り外され、高架の周りには足場が組まれていた。きっとあっという間に片付くに違いない。駅の周りの家々は、3月11日に傷つけられたそのまま、否、あれからの年月に耐えかねている様子で、流されたままの車が痛々しくその身をくねらせている。道路の真ん中まで流されてそのままになっていた家はすでに撤去されていた。



そのままの姿で残されていればいるで、心はえぐられ、撤去されればされたで、悲しみが静かに沈み込んでいくように思われた。

都路・川内村

田村市都路地区の一部（福島第一原発から半径 20 キロ圏内）について 2014 年 4 月 1 日に避難指示が解除された。帰還した人は 117 世帯 357 人のうちの 33%（2014 年 8 月）。福島から川俣、山木屋を抜けて都路町、川内村へと向かう途中、山木屋あたり一面に放射性汚染物質の仮置き場が続いていた。都路に「ファミリーマート」が、一時全村避難をした川内村は 2012 年 1 月には世界ではじめて避難した地域として「帰村宣言」をした。それからは賠償金が打ち切られている。帰村したのは住民の 52% だ。高齢者のための「介護施設」の建設がはじめられていた。川内村も住民の帰還の準備を始めている。川内村には草野新平の「天山文庫」があり、モリアオガエルの生息地、美しい自然が人々の帰りをまっている。村で生活を始めている住民は「ないものねだりでなく、あるもの探し」で村の再生に取り組む話し合いを始めている。

